

物理斗争委員は日大全共斗を再編介入を指導する！
理斗委は日大全共斗を再編介入を指導する！
理工学部全体の学友は結集せよ。

日大を抑圧から解放しよう！

セクトを批判しただけでは問題は何も解決されない。セクトのどつちが悪いのか等の真像をつきつめのもとに自らが実践する事に意義があるのだ。内ゲバの問題について言うならば実践を経る中で、より理論を養われ、かつ階級教化をもちらし正しい党派が必然的に最後まで残り革命への任務を遂行するであろう。一時的なゲバルトは重要な問題ではない二次的な問題である。主体性が問われるのは、この様な観点を捉え抜くために必要なのである。現在の全日全共斗連合が単なるセクトの寄せ集め以上のものではない事は丸りの斗いと通じて明白になった。二の中にあつて理斗委は全共斗再編の観念に基づいて九月以降斗つてきたのであるが、いま一歩発展していない。まずオニに大衆的な接点の問題、オニに明確な組織性がないという問題である。この様な問題は今後止揚していかならなければならぬのであるが現在の急務として日大全共斗を我身なりの方針で再編する事である。個別日大の秩序を右翼の支配から解放し、まずもつて自由に学回を構築し斗争委員会という形(「オニ」も含めて)をもつて母体学校当局へと進撃しなければならぬ。

各学部が分断され統一日大の組織がない以上、大衆的な斗いは組みえない。しかしそれは対権力に対する日大生の本質である。それはもちろん革命戦略の問題で言えば内的矛盾を含むであろうが、それは現在では主要な矛盾ではないのである。まず学校権力の右翼支配を解体させる事が日大生の必要とするところである。この様な重大な事は一蹴的に出来るわけではないのである(8年とは歴史的背景がらから)から着々と各学部のたてのつらがりと横の連絡を密にして望まねばならぬ事をはっきり踏まえて欲しい。大きな矛盾性を述べるなら、あらゆる不正、矛盾に斗つていくが何が主要で何が本質的なのかという様な、結果的にはミゲザグに進むのであるが、弁証法的な認識をどうして実践の中に構築するかをまよければ、その組織はやがて分解して行くであろう。理工学部の問題をどう考えるならば春斗議次のいよいよと九号館用地の学館建設があげられるであろう。この問題のつきつめなしには日大斗争は終結しないのだ。

12月 日大全共斗総決起政治集會
電通会館 P.M 1:00
理工 12:00 理斗より集會 学館
ホール

物理斗争委員会